

クス、フェッター、クレメンスが私の所にお祝いを言いに来てくれ、夜遅くには、第6中隊のピアノ部屋でのクレメントの組織精神とムックスの詩作が際立った。全体の印象は、わがチームのタレントのすばらしい多様さと9人の間のとても友好的関係は、まちがいなくその影をはるかな未来に残すものである。われわれの板東体操時代のすべての大小の体験は思い出の中で輝きを放ち、「平和宮」での自分たちの体操を楽しく思い出すことだろう。

ヘルマン・ルフは久留米から来た人が、今は第1チームの指導に加わっており、われわれはきちんと火曜と金曜の夜に鞍馬と平行棒の演技をしている。第1チームは現在、ルフ、ムックス、フェヒナーロウスキー、フォーラント、オイヒナー、ヴォルフ、フレンダー、フェッター、マイで構成されている。

日韓電報通信での呼びかけで何人か新人が加わり、ふたたび第2チームが作られた。けれど私は、こうしたことが望まれていることは判るが、拡大にははっきりした確信は持てなかった。

この第2チームには、最初の頃はウルブリヒト、ボス、ヤンツェン、ライディッヒ、マロン、ゼーゲルケン、ヘルムス、ヴィンクラー、コッホ、バウアーが属していた。フレンダーとムックスが交代で指導に当たった。その頃はこのチームの質は本当に様々で、したがって練習はチームの平均の能力に合わせるしかなく、それぞれに体操への喜びをを持たせる程度のものであった。

年が変わると収容所に散歩の時期が始まった。個人的に引率し責任を持ってくれた、この改革の提起者ブッターザック大尉には感謝しなければならない。全日遠足・半日遠足とともに、舞台俳優や年配者のような小グループにも一日ツアーの許可が与えられた。こうした恩恵をわれわれも利用し

ブッターザックと高木の両大尉に散歩の許可を申し出た。残念ながらわれわれは、天気的神様にも好天をお願いすることを忘れていた。というのも3月8日に体操クラブの遠足に出かけようとした時には、霧のような霏がかかり小ぬか雨が降っていたからである。けれどもそれを理由に中止することはせずに、まもなく雨は止むだろうと信じた。こうしてわれわれは、歌を歌いながら門から出て行った。しかしながら霧雨は止まず、われわれも戻ろうとしなかった。われわれは苦楽をともにしながらひたすら山と谷を瀬戸内海へと足音高く突き進み、海岸で日本の旅館に立ち寄りそこで衣服を乾かした。主人とおかみはすぐさま30枚の着物を持って来た。それをわれわれは最初はためらいつつ、しかし長く考えることなく身に着けた。なぜなら濡れた衣服を着てるより乾いた着物を着て温かい酒を飲むほうが快適に話し合えるからである。けれども折野谷と雨乞い峠を通っての帰り路ではまたずぶぬれになり、そのため良い気分の残りは次第に薄れて行った。晩にわれわれは体操仲間のE.の所に集まり、そこで温かい物に当たりながらもう一度その日の体験を話し合った。

この語らいの成果が次の述懐である。

1) 1919年3月8日の体操クラブ遠足について

クレメンス・フェルヒネロウスキーによる

長いこと待ちわびていた日が来た、
その日をくり返し楽しみにしていたのだ。
だからみんな「行こう、行こう」と叫んだ
仲間の輪の中で。
だから、いざ体操選手たちよ、杖を手に、
狭い谷を抜けてゆけ。

われわれは敵国の
日本の山に住まいしよう。

雨も嵐も風も恐れない
「外へ、前へ進め」と言われれば！
門を出る、歌を歌って速足で。
誰が勇気なしでいられよう？
われわれは世界へ飛んで行く、
苦労や心配は忘れよう。
自分のために花束を作り
そして明日のことなど考えずに。

日本の村や谷や頂きを
雨が降ろうと突き進もう。
そこではさまざま花を見ることができる
「ずぶぬれの粘土の」道に。
見事な桜が咲いている。
海の波が荒れている。
そして日は射さないが、
さらに楽しく進んだ。

ずぶぬれになったが、楽しく気持ちよい、
残りは海岸が続いた。
一杯の熱い「酒」がおいしい、
一人の年配者が薦めてくれたのだ。

体操選手のジョークや歌声で
 いくらかの時間が過ぎた。
 そして体操選手の歌がはるかまで響いた、
 とても楽しくこだわりなく。
 そして帰路につき、
 新しい行動に取りかかる、
 意志を強め、
 それが弱まることはない。
 そうするとわれわれは、元気で楽しくとらわれなくなる
 荒天で風が吹きまくっても。
 自由な日は終わる、
 住まいに帰り着くとすぐに。

だから「好天」よ「がんばれ」、
 それはたまに戻って来る。
 そうなったら「万歳三唱」
 そしてそんな日を贈ってくれ。
 空気がすっきりしてきれいだ、
 そんな時は遠足をすべきだ、
 そんな時は温かい日差しの下で
 自由な人生に向かうのだ。

2) 遠足の楽しい時間が終わって

今日われわれは気づいた
 このゆったりした愛するサークルでは、

みんなが一体だったことに。
 そしてわれわれはそう考えるたびに、
 楽しく杯を交わし
 そしてすばらしい時を思い出す、
 そこではみんなまったく一つだったと。

カール・フレンダー

3) 今日の体操仲間の遠足の後

収容所の何人かの人が、
 とんでもないことだったと忠告してくれた。
 けれどもわれわれは彼らの言い分には逆らわず、
 むしろありがたいと思い
 その通りと思った。
 ともかくわれわれにとってはすばらしい日だった、
 運よく誰一人けがもしなかったのだから。
 われわれはお天気的神様でも好きにはさせず、
 そこの上空では彼の思うようにはさせなかったのだから。

けれども彼の天高い聖域では
 一つの点で神様と折り合わなかった。
 彼は力づくで雲を覆いかぶせたのだから。
 そして雲はもともと望んではいなかったのだろうが
 雨を降らさないわけにはいかなかった、
 こちらの喜びを薄れさせるためにも。
 そこの天上で年寄りの神様が大暴れしていたとしても、

おれたちは彼を讃えなければならない、
 彼はおれたちに一つの光景を見ることを許してくれた、
 自分の領分で自分がどんにいきり立っているかを。
 そうしてくれたことには感謝したい。
 だからと言って彼の雨にはけっして負けはしない。

W. ムックス

第1チームが冬の間、指導者ルフの下で学び得たことのあったことが、
 フェルヒネロフスキーの企画したスポーツの夕べで、明らかにされた。
 フィッシャーはそのことを、『バラッケ』4月号の次の文章に書いている。

1919年3月29・30日のスポーツによる娯楽の夕べ

これまでここで何年も過ごしてきたのに、3月29・30日のスポーツによる娯楽の夕べのような催しが行われなかったのはふしぎなことである。確かに演芸の夕べであれこれの身体を使う技が、たまたま目玉番組としてまるで別の呼び物の間に適当に挿入されたことはあった。またいつでも、身体鍛錬や身体の本性に合った演技がすっかり公にされるのを見ることができた。さらにレスリングのような特殊な分野は、かつては何週間もきちんと習得することもできた。けれどもまるで異なるが互に補い合っている身体訓練の諸分野を、しかもその活動が一般の人々には知られておらず、したがって残念ながらその知識も評価も不十分な諸分野について、部分的にでも展望して見ようという試みはまだ誰もしてこなかった。わがクレメンス・フェルヒネロフスキーの功績はこうした試みにあえて取組み、幸運にも成果を達成したところにあった。

このような催しを評価する際には、もちろんあまり細かな点にこだわっ

てはならない。例えばどのような好みを持っていようと、こんな種目はなくてもよいとか、あんな種目はしょっちゅう見ているとかを口にしてはならない（たとえ私が、フェンシングのもっとも優雅な部門であるフルーレ競技を見るのが大好きだとしてもである）。残念だがそれぞれの個別の演技に、特別の催しでしか見られないような完璧さを求めるのではなく、全体のできを第一にしなければならない。そう大事なのは中身が充実していて多様なばかりでなく、観客はすべてに変化を求めているし、演技者にも技術的な理由から変化が必要なのだ。ともかく巧みにプログラム全体へと導いていくプロローグから、組体操グループの華やかなフィナーレまで、すっかり日常を忘れさせ注意深く構成された演技で一貫していた。

それぞれの演技がどれもとてもうまく行われていたので、一つ一つに立ち入る必要はなかろう。ともかくきちんと評価したいので、自信を持って言えそうな専門的な判断を交えて、いくつかのことについて述べてみたい。したがって触れなかったからと言って低く評価したわけではない。

まず訓練についてだが、そこでは（フェンシングとともに）に最もプリミティヴな形で、つまり男どうしの戦いという理念が示されなければならず、並み以上にこうした男性的な教育要素が注目され、強調され鍛えられなければならない。判りやすい様々な技術を伴う格闘技では、とりわけフェルヒネロウスキーとクロイツアーの試合が面白かった。おそらくこうした試合では、とりわけ終了間際の決断が大事になるからだろう。けれども師匠ばかりでなく弟子も真価を発揮し、弟子を通じて師匠はその指導の技術を発揮した。ボクシングではことに、29日のクロイツとベッカーの試合が緊迫していた。この分野ではとりわけ、板東に来て初めて訓練を受けた初心者の好成績が興味を引き、30日に前日の勝者ベッカーへのビーダーマンの挑戦試合が行われた。初心者は経験豊かな老練のボクサーに対して、巧

みに守るがっちりしたガードで魅了した。

われわれヨーロッパの格闘技に、日本の柔道を対抗させたのはうまい発想だった。われわれは、以前の予備役曹長オイヒラーのスライド講演ですでに体育学科としての柔道については知っていたが、今回は駆け引きとしての柔術の応用技術が判りやすく説明された。そのほかことに「首絞め強盗」という悪党の企みを防ぐためとして解説されたのは、策と鋭い観察と素早い決断ばかりでなく、並外れた抵抗力のある筋肉、この場合は首の筋肉が柔道家には不可欠ということだった。少なくともこの点では確かに、われわれの身体技術は中国や日本の刺激を受け入れるべきだろう。

鞍馬と平行棒の練習については、言いたいことがたくさんあって切りがない。ことにほめなければならないのは落ち着いた確実さときちんとした姿勢で、見かけは苦もなくやっているようだが、長い真面目な練習の証拠であり成果である。そしてこれこそが体操競技への最大の賛辞なのである。なんといってもこうした確実さを支えているのは、身体全体にわたる十分な鍛錬であり、専門知識に裏付けられた体操指導によってだけ達成できるものだからである。この部の最後を飾るピラミッドは、いわばこうしたことの印(しるし)である。参加したすべての人々は、すばらしい演技を誇ってよかろう。けれども誰よりも栄誉を与えられなければならないのは、彼らの代表ブッフである。このチームがここまでできたのは、明らかに彼の模範と指導のお蔭だからである。もちろんこの夕べの最良の演技の一つだった倒立についても、今言ったことをくり返さなければならない。そこで見かけでは苦も無く簡単そうに見えることのまったくチャーミングな効果は、練習のユニークさという点ではピラミットの場合と似ているが、そこで使われている小さなイスという道具がとてももろく見え、器械体操の場合よりももっと身近な感動を受けた。ところでピラミット作りの発想から美し

くとても細やかな特徴を示したのは、すばらしく高度な十字屈身だった。これは同じグループでもしなかったが、それは十字型に動くほっそりしたポーズはそうできるものではないからである。ピラミットで大胆に空中高い頂点を目指すには地面での土台がしっかり支えていなければならない、どっしりはしているがこわばらずに渡されている重さを支える線がいつも巧みに対応していなければならない。こちらではその支えが中間の高く振り上げられた十字屈身によって、とても巧みに演じられていた。

この夕べは、組体操のグループによるすばらしい美しさの中で終わりを告げた。一つ一つを特別に取り上げることはできないが、「とげ抜き」からはそれぞれ際立ったものを見せてくれた。人間の身体でできた土台が、全体の効果を高めた。以前は人気のあった「大理石」を外したのは止むを得ないことだろう。いつも十分にそれに代わるものや似たものが補われているのだから。小麦粉やその他の白いほこりやたとえ大理石であっても、どうして絶えず動くたくましい肢体の健康で生気に溢れた本物の褐色の肌よりすばらしいと言えようか？このグループは静かに、長い心をこめた作業の成果を示してくれた。彼らは、厳しい身体訓練への寡黙だが雄弁な賛辞を伝えてくれた。結びのポーズの青春への訴えは、ここにいるわれわれ青年にもさらに強いこだまを呼び起こすことだろう。

健康だからこそ美しい身体への喜びは、一つの文化の健全な衝動の証(あか)しである。制作つまり芸術と、それに伴う美的な喜びのもっともすぐれた対象は、忘れがちなことだが現実と生活であり、そしてそれらの中での主たる対象は人間自身である。そのうえ美はそれ自体のためにだけでなく、よい趣味を育てる助けにもなるべきだなどと言うと、おそらく唯美主義者は首を傾げることだろう。美を育てるはずのものが最も良い意味で美に役立つのなら、美は安んじて奉仕に徹したらよかろう。生活が美になる

べきならば、美は生活の中に浸透していかなければなるまい。現実の世界、つまり実際の世界では美はきちんととらえられた合目的性であり、完全な事実認識であり、われわれの身の回りに実際に与えられたもの、つまり何よりもわれわれにゆだねられた身体を形成するうえで最高の意味を持つものである。もしも実際に役立つ倫理なるものが認められるとしたら、そこでは美的なものが倫理的なものとまったく一体のものとして考えられているのである。身体鍛錬は身体芸術であり、そうでなければならない。身体芸術がなければ、実際にしか満足できないような身体訓練もあり得ない。正しい意味での芸術らしさとは、実際に役立つ身体訓練の成果であり表現であるばかりでなく、それは困難で険しい道の導き手であり、導きの星でもあり、結局は例示の試みなのである。「スポーツ」という味気ない無内容な言葉は、よその民族文化ではなく、およそ創造的でなくむしろ享樂的でしかない、生活を遊びにし遊びを生活に変える別の社会層の文化の贅沢なパーティーの食べ残しに過ぎない。スポーツという言葉を使うことで、われわれがそれで示そうとして価値あるものをいい加減なものにしないほしい。そんな言葉を使うことで、この言葉のイメージの貧しさや思想性の無さを事柄そのもののの中にまで持ち込むようなことはしてはならない。

終わりに、おなじみの「ウィーン・アンサンブル」にも喝采を送ろう。彼らはいつものように快く出し物の伴奏を務め、その協力があつたことで合間の時間はよりくつろぎのあるものになった、ありがたいことである。

カール・フィッシャー

体操競技はわれわれ競技者満足させるばかりでなく、何人かの以前の競技者をも奮い立たせてもくれる。数日後クナープとベーヴィングという二人の年配の勇者は、急いでわれわれの仲間に加わるしかなかった。もちろ

ん二人は喜んで受け入れられた。

次にお伝えするのはこれまで書記だったオイヒラーの、つまりさまざまな職務を終えた4月13日までの時期の最後の報告である。

上述の3月29日と30日のバラック第1棟前での祭典とともに、春の体操開きについての考えが浮かんでいた。

それは4月13日に始まった。

朝8時半には体操広場は椿の葉で飾られ、綱上り器具は凱旋門になり、鉄棒には緑の枝が垂れ下がっていた。M.A.K. 吹奏楽団は、プリンツの下で再び蘇ったいわゆる「古参兵」チーム、次に第1チーム、最後に第2チームが平和宮から動き出すと、演奏を始めた。広場は収容所の仲間で囲まれ、そこには少なくともまだ見物することへの十分な関心が溢れていた。鉄棒・平行棒・鞍馬・跳馬が演じられ、最後に第1チームと第2チームの間で、障害リレー競争が行われた。第1チームが勝ち、取り決めに従って第2チームはコーヒーをおごらなければならず、1時に印刷所の隣の講義室でそうになった。「楽団」は、今回はクレメンス、フォーラント、バウアー、ヤンツェンによって演じられた。第1チームと第2チームはこのような仕方で一致して楽しく協力し、われわれも次のような仕事をした。

おそらく、この夏は収容所での体操への関心はまた強まり、以後は機構ももう少ししっかりとしたものにならなければならない。12日の晩に私とムックス、ルフ、フェルヒネロウスキーが話し合ったように、以下の提案は全員賛成した。つまりCL.フェルヒネロウスキーはクラブ長、ルフは体操係、ムックスは会計と書記、シュタールは設備係である。名の上がった人はその役につき、ムックスは条件付きだった。毎月体操係が行う体操試験と総会を結びつけるという提案も、満場一致だった。

同時に、ひょっとして押し寄せてくるかもしれない体操集団を指導できるような組織も準備された。私は密かに、いわば大きな協会への基盤を作ってはどうかと考えていた。それはこの冬まとめた精神、つまり互いの友情と、何かを作ろうとする際の援助と介助の精神は、これからも守り続けるという願望の表現だった。

さらに、上の池のそばに亡くなったわれわれの仲間のための記念碑を作る作業にわれわれが何度か加わったことも言及しておかねばならない。これに参加する考えはムックスから出たものだが、私はこのことをここにしっかり書き留めておきたい。というのも私にとってこうした考えが述べている精神は、個人的にはことにドイツの体操を評価するにふさわしいことを示していると思うからである。それは社会的精神のひとつなのである。すなわち全体的なものに、共同体に向けられた精神、スポーツの最高成績だけで終るものではなく、個人的なものを超えたより深くにある倫理的な基盤を持つ精神、そのひとつなのだ。

このように私は今日この文章を新たな書記兼会計係にお渡しし、彼がわれわれ板東体操クラブの有益で遥かな未来にまで輝く歴史を書かれる機会を活かして下さるようお願いしたい。

オットー・オイヒラー

私は当時、書記兼会計係の役を引き継ぐ際に私の考えを次のようにまとめた。

板東、1919年4月15日

私は前任者の役を条件付きで引き継いだ、それにはそれなりの理由があった。義務だろうから、そのことを次に説明しておきたい。われわれの仲間の狭いサークルでは冬の間体操は、みんな互に身近なところで行った。

ある人は熱意から、ある人は能力から、いつも新たな活動へと駆り立てられた。毎晩何らかの形で小さな競技会が開かれ、大事なものは筋力を試すことだった。友情と楽しさはどの体操レッスンにもあった。男子に二言無しというのがわれわれの間で守られていることであった。どの観点にも、欠点についての合意と認識が含まれていた。けっして公共心と善良な精神が欠けることはなかった。一度心に決めたら直ちに実行された。要するに各人にとって体操レッスンは不可欠なものであり、体操場は保養施設になったのである。こうしたチームの特性にそれぞれにとって魅力があり、一体感を生んだ。これまでチームが育んできた評判の好きを守り続け、今後もこのサークルの一員であることは、みんなにとって名誉なことだろうが、書記としての私にとっても、チームの活動や体操の繁栄をさらに書き続けることは嬉しいことである。

これまで書記として書いてきた報告をそれらが書かれた順番に従って、余計なコメントを加えずにそれだけでお話ししたい。

〔1919年〕4月13日に開かれた春の体育開きは、思った以上に収容所で反響を巻き起こした。単にたくさんの数の仲間が体操に興奮したからだけでなく、われわれの収容所の記録者も『バラック』の最初の月刊誌の収容所漫筆で大きく取り上げてくれた。彼は書いている。

「復活祭直前の日曜日に開かれた春の体操開きは、ほとんどこれまで縁のなかった体操行事を身近なものにしてくれた。先週の金曜日、競技者たちは木こりの人々と一緒に緑の枝を取りに森に出かけた。今回はその枝で浴室をではなく、体操器具を飾るためだった。鞍馬だけは、緑色の足にすることは諦めざるを得なかった。それで日曜には、キビキビとしたチーム別演技と自由演技が行われた。いつものように前後から写真が撮影され、疲れを知らない M.A. 吹奏楽団の音楽伴奏がつき、その後新しいこと、つまり

障害リレー競争が行われた」。

4月13日に私は、1円20銭の現金とそれについてきた利息1円75銭を受け取った。このお金は、以前の「公会堂」体操クラブに寄贈された基金からその会計係だったE. エンゲルが清算してくれた。このお金を手に入れることで、私は最初の成果を得ることになった。

スポーツ委員会が支給してくれる助成金は十分でなかったので、5月1日から10銭の月会費を上げねばならなかった。われわれのところではこれまでなされたことのない改革だった。

4月17日にスポーツ委員会の企画で競技会が開かれ、体操からも11人が参加した。85人の参加者のうち、われわれのC. フェルヒネロウスキーが第8位に入った。景品の箱入りボンボン、体操の会の折に食べつくされた。

4月13日に選ばれた体操係は、体操競技会について助言する形でその日初めてみんなの前に現れた。体操係の提案が行われ、代表がきっぱり支持を表明した。私にはこの提案はしっくりこなかった。というのも昨年計画された体操競技が開催できなかったのは、たくさんの新しいことを含む演技のくり返し練習がほとんどの人から体操競技会、いや体操そのものへの意欲をそいでしまったからである。ルフが強調したように、まさに競技会によってたくさんのことを学べるが、私の感覚では模範演技を通して同じことを達成できる。その場合は誰にも参加できる機会があり、ことに体操レッスンの際に演技のあれやこれやができないという不快な気持ちが生れない。そのほか全員が参加することで誰もが体操人になることができるのであり、そうなるにはまず受賞しなければならないわけではないという見本を示せる。体操係のルフは私に自分の考えを納得させたと考えたのだろう、競技会が6月1日に予定された。演技と条件は2,3日後に知らされた。

収容所では復活祭の日（4月20日）に、瀬戸内海への一日遠足があった。海岸での3時間の休憩の間、去年の体操係ヤンセンの指揮の下で体操競技が行われた。与えられた景品のうち2つは体操選手が手にした。しかも第2中隊の綱引きチームのフェルヒネロウスキーがMAに勝ち、私はスプーンレースで2位だった。その日は、われわれの捕虜生活での光明だった。その理由で、板東体操チームの大部分も海岸での写真に加わった。

第2チームが相次いで増えたので4月24日に体操試験が開かれ、結局新たに第3チームが作られた。パワーが第1チームに上り、このチームは最も多い12人に達した。

4月27日

今日の日曜体操時間には大いに驚き、同時に大いに困惑した。われわれのクナープの誕生日だったが、われわれは気づかなかったのだ。チームの同じくまだ若いメンバーが彼にお祝いを言って初めて、われわれも誕生日を迎えたかれにお祝いの言葉をかけることができた。それは力強い「ゲート・ハイル」で頂点に達した。慣例に従って、本人をチームのカフェに招いた。けれども彼はすでにこの日のために別の取り決めをしていたので、中止せざるを得なかった。それでもその日は当人を驚かすことなしに過ごすわけにはいかなかった。本部で日曜のコーヒー談話会の時に一つのプランを作り実行した。線画の巧みなフェルヒネロウスキーがチームの写真に趣向を凝らした厚紙表紙をつけ、献辞を添えたのだ。それからクナープは体操選手らしく巧みに自分の部屋から連れ出され、写真と大急ぎで調達した花束が並べて机の上に飾られた。残念だが私は誕生日の顔を描き出すことはできない。そのような素養は何も私にはないからだ。

「クッデル」と呼ばれている仲間のオスカー・マイの誕生日は、ありがたいことにもう何週間も前からわれわれは知っていた。そのためクレメンス